



ごうちゃんねる (GO-CHANNEL)

2021/06/05 公開

■ユダヤ入門シリーズ■

26 「ユダヤ神秘主義カバラとオカルト的解釈」

東住吉キリスト集会 高原 剛一郎 氏



お元気ですか。高原剛一郎です。今日はユダヤ入門シリーズ第 26 弾！パチパチパチ！
積み積み第 26 回目になりましたが、今日はユダヤ神秘主義についてお話しします。

中世時代のユダヤ人たちは、今までお話してきたように迫害と屈辱が延々と続くんですねえ。
そんな中で、ある思想がユダヤ人の心を捉えてしまいます。
それはカバラと呼ばれているユダヤ神秘主義で、カバラを信奉している人をカバリストと言います。

カバリストたちがとびつきり大事にしていた書物がゾハールですが、これはヘブライ語で“輝き”という
意味です。13 世紀にモーゼス・デ・レオンが編纂しました。
彼によると、ゾハールは 2 世紀にユダヤ人の賢人シメオン・ベン・ヨハイに 神が特別に啓示を与えた書物
だ、ということになっているのですが、色んな学者が違う意見をいっぱい言ってて、よく分かりません。

それはともかくとして、このゾハールという書物ですねえ、聖書解釈において 1 つ大問題をもたらした
んです。そして、ただでさえ不幸であったユダヤ人たちを 一層不幸のどん底に突き落としました。

ゾハールに何が書いてあるのか？ 彼らもユダヤ教徒の一員なので、もちろん聖書（旧約聖書）を神の言
葉として信じていますが、「旧約聖書の神の言葉には表の意味と裏の意味の両方がある」と言うんです。
「普通に読んだら表の意味しか分からない。裏の意味まで読み込むことができ初めて 神の心に触れる
ことができる。」

では、裏の意味はどのようにして読むのか？

例えば、ヘブライ語の聖書は右から左にズラッと、横書きでヘブライ語の文字が書いてあります。
この横書きのヘブライ語を縦書きに読んで その頭文字を並べ、意味のある単語を作ります。
それを順列組み合わせで色々くっつけたりしながら、書いてあるのとは別の意味を読み込んでいく。

或いは、特定の数をとびとびにして その文字の頭文字を並べ、ヘブライ語のつづりでどんな意味になる
のかと読んでいったりする。また、ヘブライ語はそれぞれ数字に換算できるので、作り上げた新しい単語
を文字化して、足したり掛けたり引いたりすることで特別な意味を読み込んでいく。

これを数字術（ゲマトリア）と言います。これは今のオカルトや占いにも取り入れられていて、いかにも
深遠な意味があるかのように扱われていますが全くナンセンスです。

昔『聖書の暗号/バイブル コード』という本が一世を風靡したのをご存知でしょうか？

マイケル・ドロズニンが書いたトンデモ本です。

この本の中で引き合いに出されているのに、こんなのがありました。

「創世記の中で最初にタヴ (n) という文字が出て来る。これを起点に 50 文字毎に文字を拾い集めると、
ヘブライ語のつづりで “トラー (タヴ・ヴァヴ・レイシュ・ヘイ) ” になる。これと同じことが出エジ
プト記でも起こる。これは聖書だけに起こることだ。ここに聖書の秘められた意味がある。」

この本によると、広島に原爆が投下されることも聖書の暗号で全部書いてあると。もう全くナンセンス。

ある意味を持った単語になるように、縦横無尽に順列組み合わせをしているに過ぎないのです。
“この読み方でこんな意味がある” というのは、自分が読み込みたい意味をいくらでも取り出すことができるので、それは聖書を読んだことになりません。自分が気に入る思想や、自分が考えたいこと・見たいことを文字の組み合わせで勝手に繋ぎ合わせているわけで、これでは聖書を読んではいけない。

『聖書の暗号』という本の読み方はどこから来たのか。ゾハールなんですよ。
このゾハールの読み方によって中世のユダヤ人、また近世のユダヤ人たちは、ただでさえ不幸なのに一層不幸な状態に置かれてしまったのです。

恣意的な読み込みで、「メシア到来の日時が書いてある！」「〇年〇月にメシアが来ると読める！」「われこそはメシア到来の前触れである！」

また、その読み方で「私自身がメシアなんだ」と妄想してしまう人たちが、中世から近世にかけて続出したんです。続出するだけでなく、それについて行ったユダヤ人たちがたくさんいたんですね。

その中で有名な偽メシアを 1 人紹介しましょう。シャブタイ・ツヴィ (1626-1676)。
1626 年にオスマン帝国のスミルナ (現イズミール) で生まれました。
当時のヨーロッパは 30 年戦争・天変地異・伝染病があり、ユダヤ人にとっても苦しい時代が続きました。
そんな中でシャブタイは、幼い頃からゾハールやカバラの思想にのめり込んで行ったんです。
そして成人すると、体を痛めつけ、断食をし、真冬の地中海に入って水籠り。
結婚 2 回してますが、夫婦関係一切持たず、2 回ともすぐ離婚。普通に考えると変人です。

しかし当時「ああ、メシアよ、来て欲しい！」と思っているユダヤ人たちの間で、「この人 メシアではないのか？」という噂が立ったんですね。「こんなに禁欲的に自分の欲望をコントロールできるのは普通の人間じゃない。この人 メシアじゃないか？」
そして、「彼は考えられないような奇跡を行ったんだ」という噂が乱れ飛ぶようになり、多くの信奉者が彼に付き従って、一緒にカバラの思想を学んでいきました。

彼らカバリストの計算では、1648 年に大きな奇跡が起こると信じられていました。
1648 年/シャブタイ 22 歳の時、とうとう彼は言うてしまうんです。「私はメシアである。私はヤーウェなる神によって立てられた。」 ユダヤ人たちはヤーウェという言葉が発音しません。アドナイ (主) という言葉に言い換えます。あまりにも神聖な言葉なので人間は発音してはならない、とされているんですね。ところが、「私はメシアなので、そんな決まりに縛られなくてもいいんだ。」
自分がメシアであることを立証するためにも、神の御名をそのまま発音するんです。

スミルナのユダヤ人ラビたちは「こんな危険な奴はおらんぞ！」ということで追い出しました。
追い出されてもシャブタイは少しも気落ちせず、むしろオスマン帝国の他の中東地域やヨーロッパを回りながら、方々で祈り、自分がメシアなんだとメッセージをし、あちこちで信奉者が集まって来るようになったんですね。そうして世界を回って、自分を追い出したスミルナにもう 1 度戻った時、「メシアはこの人だ」という噂が逆輸入されていたので、スミルナでは「メシア、万歳！」と歓呼の声が上がり大歓迎されました。

そして、10 歳と 12 歳の男の子と女の子が急遽 1200 人も結婚するんです。
これは、カバリストの信仰の中に「生まれるべき人間が生まれきるまでメシアは来ない。だから、結婚できるユダヤ人の子供はとにかく結婚しなさい！」 ムチャクチャなことが起こるんですね。

このシャブタイ・フィーバーは、オスマン帝国が押さえていたヨーロッパ全土に広がったので、スルタンの耳にも入りました。メシアは“ユダヤ人の王”という意味もあり、“ユダヤ人の王”は、すなわち全人類の王になるということなんです。オスマン帝国に王様は1人でいいんです。ところが、自分以外にメシアを名乗っている人物がおる。これは聞き捨てならん。スルタンはコンスタンチノーブルにシャブタイを呼び出しました。

普通、オスマン大帝のトップから「ちょっと来い」と呼び出されたら「えっ、何が起こるんか？」となるはずですが、シャブタイは少しも動ぜず、自分の側近26人にこう言いました。「いよいよ時が来た。私は全世界を26等分にして、おまえたちに1つずつ国を与える。おまえたちはそれぞれの国の王だ。そして私は王の王だ。」少しも怯えず、きらびやかな随行員を引き連れて、船に乗ってコンスタンチノーブルに行きました。スルタンに会うために。

コンスタンチノーブルに上陸するや否や、逮捕されたんですね。「おまえ、ナニ馬鹿なこと言っとるんや。」スルタンはシャブタイを処刑しても良かったんです。だけど、処刑したら却って殉教者にしてしまう。英雄にしてしまう。それで、エジプトにあったスルタンの城塞の中に閉じ込めてしまいました。無期懲役ですよ。そこに幽閉して外に出られないようにしてしまうんです。

…が、その時既に世界中に、シャブタイはメシアだと信じているユダヤ人たちがたくさんいたんですね。シャブタイがエジプトに閉じ込められているのが分かった時、世界中のユダヤ人資産家たちが彼に面会に来て贈り物するんですよ。だから、投獄されているにもかかわらず毎日宴会。王様みたいな生活。彼は贅沢三昧の王宮の中にいるような生活を3か月続けます。

その間に、ポーランドのカバリストであるネヘミヤ・コーヘンが、シャブタイがほんまにメシアなのかを確認するために面会し、3日間昼夜にわたって彼と討論しました。結果「コイツはメシアではない」と結論を出したんです。そして、「偽メシアのシャブタイは、オスマン帝国で自分の国を興そうとしている。いわば革命を起こそうとしている。オスマン帝国に謀反を起こそうとしている」とオスマン政府首相に報告します。

首相からそれを聞いたスルタン（アフメド4世）は、もう怒ったんですねえ。「全然反省しとらんじゃないか！」もう1度シャブタイを呼び出し、自分の前に立たせて言いました。「おまえはイスラム教徒に改宗するか、さもなくば死か、どちらか今すぐ選べ！」

シャブタイね、即決でイスラム教に改宗するんです。「はあ〜っ?!」ですよ。「はあ〜?!」と。今まで彼について来た人たち、いったいどうなるんですか？「うう…それでも私はメシアであることを撤回しない」じゃなくてね、即決！「はいっ！イスラム教徒になります！」それで、イスラム教風の名前、モハメド・エフェンディに改名して、スルタンのお城の門番になりました。

彼はメシアだということについて来た人たちは、どれほどショックだったのでしょうか。また、彼はメシアだと折り紙付きで推薦したラビたちは、もう面目丸つぶれで死ぬほど恥ずかしかったと思いますよ。期待が大きかった分、ユダヤ人たちの絶望感は深く、そのダメージは大きかったのです。

ところで、なぜこんな間違った、おかしい人物をメシアだと信じてしまったのか？理由は2つあります。■ユダヤ人たちが、既に来られた本物のメシア/ナザレのイエス/イエス・キリストをメシアとして受け入れていないから。

メシアはもう来たんです。イエスただお一人だけが、ユダヤ人が大事にしている旧約聖書のメシア預言の全部に当てはまる方なんです。この方以外に、全部に当てはまる方はいないんですね。その方をメシアではないと拒否しているので、偽メシアが来た時に簡単にしがみついてしまったのです。

■ 聖書をカバラ的なおかしい読み方で読んだから。
聖書に裏の意味なんかありません。表の意味だけで十分なんです。

新約聖書 **ペテロの手紙第二 1 章 20 節**。これは旧約聖書を指して言っている言葉です。
ただし、聖書のどんな預言も勝手に解釈するものではないことを、まず心得ておきなさい。

勝手に解釈は、別の翻訳では**預言者自身の解釈ではない**。これが**勝手に解釈**の意味です。
勝手に解釈しないというのは、預言者が解釈し理解しているのではない 別の解釈で読み込んではないということ。

なので、聖書を正しく正確に理解するためには、預言者がどんな理解で語っているのかを知る必要があります。つまり、預言者はいつ・どのような状況で・どんな時代背景の中で・誰を対象に語っているのかを知らなければなりません。

同時に、その預言者の言葉は前後の文脈の中から読まなければなりません。
文脈から切り離して勝手な解釈したら、どのようにも読むことができるからです。
文脈で読み、かつ預言者自身がどんな時代背景の中で、誰に対して語った言葉なのかを知らなければなりません。

文脈の中で読むことが大事なのですが、カバラの読み方は、文脈どころか単語そのものをバラバラにして、その頭文字をあっちこっちくっつけて別の単語を作り上げ、それで裏の意味だと言うんですから、それはね、聖書を読んだことにはならない。

オカルトが跋扈(ばっこ)している今の時代、真っ当な聖書解釈をすることが本当に大事になっています。クリスチャンの間でも、ゲマトリアに特別な意味を見出したり、おかしい読み方が最近流行ってるんですね。“聖書は聖書で解釈する”という大原則から離れないようにして、正確に読む者でありたいと思います。

ということで、今日の話はここまでです。
また『ごうちゃんねる』でお目にかかりましょう。それまで皆さん、ごきげんよう。さよなら！

*使用した聖書は『聖書 新改訳 2017』です。